25 何ばしょっとー、本ば読んどー

九州方言の格助詞

長崎県出身の田中くんは「何をしているの？」を「何ばしょっとー？」、「本を読んでいる」を「本ば　読んどー」と言います。「何ば」と「本ば」の「ば」は、共通語で言えば「何を」「本を」の「を」になると教えてくれました。

どうして長崎県では「を」を「ば」と言うのでしょう？　答えを言ってしまうと、助詞「を」に助詞「は」をつけた「をば」という言い方からきているのです。映画やドラマで、警官などが「失礼をばいたしました！」（失礼をいたしました！）と言っているのを、聞いたことはありませんか？　「失礼を」ということばをはっきりと示すために「を」のあとに「は」をつける言い方は、少し古風な感じもしますが、共通語としても使われます。また、「をは」を「をば」と濁るのは、「筆箱（ふでばこ）」の「はこ」が「ばこ」になるのと同じ現象です。

「をば」から「ば」への変化は、次ページの地図中にある「ノンバ」にヒントがあります。「本をば」のように直前の音が「ん」になるときに、早く続けて言うと「本のば」あるいは「本ぬば」のように聞こえます。それで直前が「ん」ではない場合にも、この地域では「をば」を「のば」「ぬば」、さらには「のんば」「んば」と言うようになっていったと考えられます。

手ーのんば　洗わんね。（手を洗いなさいね。佐賀県藤津郡太良町大浦）

きゅーわ新茶んば持って来たと。（今日は新茶を持ってきたの。長崎県諫早市猿崎町）

これらの例からも、「をば」から「ば」への間には音の変化があったことがわかります。そしてついには、「のん」や「ん」の部分を省略して「ば」だけになったのです。

しかし、この九州方言の特徴ある格助詞「ば」も、九州全域で使われているわけではなく、三分の一程度の範囲でしか使われていません。左の地図に見るように、九州の西部（熊本県、佐賀県、長崎県、福岡県の西部）にみられる特徴的な方言です。

対象を示す助詞「を」（老年層）の分布

（〜N）：前に来る音が撥音（ン）の場合。

『九州方言の基礎的研究』（1969 年、風間書房）P.168 をもとに作図。

なお、遠く離れた東北地方にも同様に「ば」を使う地域がありますから、この言い方は古く京都から発生して、だんだん遠い地域に広がっていったことがわかります。

＊

先に挙げた九州の西部では、助詞の「が」の代わりに「の」が盛んに使われます。

犬のおっぱい。（犬がいるよ）
雨の降りよる。（雨が降っている）
歌のうまか。（歌が上手だ）

しかし、「の」だけを使うわけではなく、

おいが行く。（俺が行く）
阿蘇ん行くときゃ、バスが早かばい。（阿蘇に行くときは、バスが早いよ）

のように、自称（自分を指すことば）の後や、何かと比べるとき（バスと他の交通手段を比較するなど）には「が」が使われます。また、「先生の来らした。（先生がいらっしゃった）」、「泥棒が来た。（泥棒が来た）」のように、尊卑（自分より目上か目下か）の違いによって「の」と「が」を使い分ける地域もありますし、「の」の音が「ん」に変化している地域もあります。

同じ「が」を表すものとして、九州の格助詞には全国的にも非常に珍しい「い」と「ぐ」が大

分県で使われています。具体例を挙げましょう。

花ぐせぇーた。（花が咲いた）　…大分県の北東部

花いせぇーた。（花が咲いた）　…大分県南東部の大野川の流域

「ぐ」というのは、「が」が音変化したとも、「ようこそ」などに使われる助詞「こそ」が音変化した結果とも考えられていますが、語源についてはっきりしたことはわかっていません。

一方、「い」のほうは、万葉集などに出てくる古い助詞に「い」があることや、韓国語の「が」にあたる「이」（イ）があることから、いっそう語源への関心が持たれます。また、「ししんでん（紫宸殿）」を「ししいでん」とも言いますし、方言では「人参」を「にいじん」などと言うところもあり、前述の九州西部方言の「の」を元にして、「の」が「ん」に変わり、それがさらに「い」に変化したのではないか、とみる考え方も示されています。

しかし、この非常に珍しい「ぐ助詞」「い助詞」ともに、使っているのは高齢者に限られており、今ではこれらの方言の行く末は風前の灯火です。

（松田美香）

これが九州方言の底力！

「本ば読んどー」の「ば」は、「をば」から生じた格助詞。ほかにも、「の」「ぐ」「い」など、九州方言ならではの格助詞があり、音の変化や語源への好奇心をかき立てます。